

# オキュパイ運動における「ユートピア」

## ——公共空間を領有する社会運動 (2) ——

ニュースクール・フォー・ソーシャルリサーチ

中川 圭

2011年は大規模な社会運動が西欧、北アメリカ、中東／北アフリカ、東アジアなどさまざまな地域で頻発する民衆政治にとっての記念碑的な年となった。抗議の対象やイシューは地域によって異なっていたものの、空間を占拠するという手法が多く、多くの運動に共通する特徴であった。とりわけ、秋にニューヨークで勃発した経済的不平等に抗議するオキュパイ運動（以下OWS）は、ウォール街というグローバル金融の中心地を占拠するという大胆な行動により、大きな支持を集めることに成功した。本報告では、OWSによる開かれた広場における空間占拠を事例に「公共空間を領有する社会運動」という林報告との共通した問題に対して一つの解答を提示する。具体的には、報告者によるOWSの参与観察記録およびOWSのウェブサイト、関連ブログ、新聞報道などの一次資料から、空間占拠が当事者たちによってどのように実践され、意味付けられ、また、OWSという公共圏がどのようにして公的権力と私的領域に対峙していったのかを分析し、OWSの公共圏としての特徴を明らかにする。

2011年9月中旬から11月中旬まで続いたOWS運動の背景には、2008年の金融危機を引き金とした景気低迷および第一期オバマ政権へのリベラル層からの失望があった。従って、OWSはグローバル資本主義と議会制民主主義への批判という両輪で展開し、参加者たちは既存の社会システムとは異なった別の社会のあり方を提示することを試みた。占拠された民間所有の公園であるズコッティ広場では、人びとが寝泊まりをし、寄付によって集められたお金から食料も提供された。また広場内では、直接民主主義の理念のもとで、運動の方針やさまざまな社会問題に関する開かれた会議が絶え間なく実施され、社会問題に関心を持つ国内外の人びとの新たな出会いの場として機能した。そして、これらの活動はインターネットとマス・メディアを通じて拡散し、占拠という手法は「われわれが99%だ」というスローガンと共にさまざまな地域へと波及した運動のアイデンティティとなった。このようなOWSによる公共空間の土台自体を自ら作り出す実践は、理論的に言えば、ハーバースから続く公的権力と私的領域、そしてそれらのはざまに位置する公共圏という近代型の三分法を問い直す実験であった。

ただし、開放性が極めて高いOWSという公共圏は、人里離れた場所に隔離された形で存在するコミュニオンや建造物に守られたスクォーティングなどの閉鎖的な公共圏に比べて、公的権力（ニューヨーク市当局）と私的領域（近隣住民）双方からの危機にさらされ易いという特徴を持っていた。市当局は、広場の清掃などを理由に占拠者の立ち退きを要請し、近隣住民は、ドラム・サークルが奏でる音に対して抗議を申し入れた。そうした外部の圧力に対抗するために、参加者たちは占拠空間を「ユートピア」として意味付けることによって世論の支持を集め、その意味付けを盾に外部の圧力と交渉した。しかしながら徐々に参加者同士の内紛、暴力の頻発や薬物の使用などによって占拠空間内部の秩序が揺らいでいくに従い、占拠空間を「ユートピア」として主張するための正当性は保たなくなっていった。その結果、外部世界との交渉の武器がなくなり、占拠空間は警察の強制排除に抗うことができなくなった。OWSの開かれた公共圏は占拠の持続性という意味では脆弱であったが、その儚さ自体を公にすることによって運動の精神は2012年以降も存続し続けている。